

島根大学 ラフカディオ・ハーン研究会 ニューズレター 第11号

編集：島根大学ラフカディオ・ハーン
研究会事務局
所在地：〒690-8504
島根県松江市西川津町 1060
島根大学法文学部 渡部研究室
発行：2019年 10月 12日

Hearn and 2019

Anthony Kelly

Matsue city, Tourism Promotion Department,
International Tourism Division,
Coordinator for International Relations (Ireland)

To many residents of Matsue, it is a great surprise that Lafcadio Hearn is not a household name in Ireland. In fact, to people who are particularly familiar with Ireland it was more of a surprise that I knew of him before coming to Japan. There are many reasons why we should know of this great figure, and many lessons we can learn from him. But the unfortunate reality is that most Irish people have never heard of him.



But there have been a number of recent developments which will grant Irish people an opportunity to learn about Hearn and his life work. Of course, most credit should be given to the various groups in Matsue City who have been researching and educating the world about him continually for decades, and to the Lafcadio Hearn Japanese Gardens in Tramore who have done much work to link Japan and Ireland, and teach Ireland about Hearn especially. However, in this article, I would like to focus on two interesting developments in 2019 alone.

First, in the world of sport. Ireland

entered the Japan-hosted 2019 Rugby World Cup with the official world ranking of number one, the first time the Irish team has ever achieved that rank. This event is particularly significant for Ireland as it has diplomatic ramifications. The United Kingdom is scheduled to leave the European Union during the World Cup period and this could cause a strain in Ireland-Northern Ireland relations. If the Irish team, which represents both the Republic of Ireland and Northern Ireland, performs well at the World Cup it would be a significant example of cooperation between the two territories. Thus, it is a very important opportunity, putting the eyes of all Irish people wherever they are on Japan, and consequently Japanese-Irish relations.

Secondly, in the world of film. Irish actor Jack Reynor, star of horror film 'Midsommar' made his filmmaking debut this year with the short film 'Bainne' (Irish: "milk"). The black-and-white independent film is heavily influenced by Kwaidan and is said to be a loose retelling of the ghost story Hearn shared, ~"A Woman Who Buys Syrup". The film debuted at the Galway film festival in July and a deal has been signed to air it on Ireland-UK TV from early next year.

With Hearn's influence permeating many different genres of culture, we can expect interest in him to grow in Ireland in the near future. And hopefully this will help Hearn's legacy bring Ireland and Japan, and indeed, Matsue, even closer together.

【 ハーンとわたし 】

『さまよえる魂のうた』から

奥山啓子

今手元に一冊の本を置いている。『さまよえる

魂のうた』【池田雅之編訳（ちくま文庫）】だ。この一冊に出会わなければ、私のハーンに対する印象は子供の頃のままの浅薄なものであったろうと思う。

それは、手短かに言えば、「晩年松江に来てせつさんという日本人妻をめぐり、日本に帰化し小泉八雲となる。せつさんから多くの日本の伝承物語、特に怪談を口頭で聞き取り英語で再話した。松江の風景、文化、人を愛し世界に紹介した。日本を愛し、後年失望してもなお、妻の故国をいとおしんだ異国人」というものである。

ハーンが再話した日本の怪談、奇談は、多くの映像にもなり、声に出して朗読するのにもとても魅力的だ。ハーンが熊本において書き記した知られざる日本松江の、『日本の面影』は、ここに生まれ育った者としては大きな誇りであるし、かつて同タイトルで脚本化された山田太一氏の TV ドラマや、舞台に感動した者の一人でもある。が、それは身びいきの枠に留まり、ハーンの何がそんなに優れているかと問われれば、ちょっと口ごもってしまうようなところが正直あった。

しかし、冒頭で言及した一冊の本が、その思いを根本から変えたのだ。その第一章には自伝的エッセイが収められている。54歳で急逝したため、まとまった自伝にまでは成らなかったようだが、これを読んだ時、私は、「えっ、妖精も、のっぺらぼうも、夢の中か現実なのか、ハーンは実際に子供の頃に体験していたのかあ」と、驚かされた。そして、なぜハーンがせつさんの語る話にそんなにも惹かれたのか、納得できたような気がしたのである。単なる異国の物語に対する興味本位のものではなく、幼児期の原風景に突き動かされたものだったのだなあ、という感慨をもったのである。

また第2章から4章は、ハーンが東京帝国大学で行った英文学や西洋文化についての講義録から成っている。特筆すべきは、これはすべて学生達の筆記ノートからまとめられたもので、ハーン自身が書き留めたものではない、という点である。この中に収められているハーンの講義を、私はおいしいお菓子をいただくように、心を奪われて読んだ。だから「日本文学の未来のために——最終講義」というタイトルを目にした時は、最後となる講義を聞く当時の学生達の思いと重なって、目頭がちょっと熱くなった。

この講義録には、ハーンの魅力に溢れる英詩、英文学の考察ばかりでなく、ロシア、ドイツ、フランスといった広範にわたるハーンの知識、見解が記されている。当時の日本とその行く末に対する透明な示唆は、私の浅い心にも心地よくストーン、ストーンと響いていったのである。そして、

今まで持っていた、単なる再話作家、という人物像から、計り知れない深い洞察力をもった、世界に知らすべき尊敬すべき偉人、となったのである。

会に参加させていただいて、これまで『日本の面影』の中から、様々なエッセイを英文で読む機会を得た。そしてハーンが多用する **ghostly** という語について、この『さまよえる魂のうた』の翻訳者、池田雅之氏が書いておられる一文が大変参考になったので、最後に引用させていただき、私の拙い文章を終わりたいと思う。

八雲に言わせれば、**ghostly** とは「神」を指す言葉であり、「神聖」「神秘」にして「宗教的なもの」のことを言うのである。そして、さらには人間の内面や魂を表象する「霊的なもの」をも指している。したがって、昔は名詞の **ghost** という一語で「神」「宗教・神秘」「霊・霊性」といった三つの意味を兼ね備えていたことになる。私は、この **ghost** の多義性の中にこそ八雲文学の真髄を解く鍵があると思っている。これら三つの領域を含み込む **ghostly** なものの探求こそが、八雲文学の本質だと考えている。

（「八雲文学の原風景と **ghostly** なもの」後書きより）

【 書 棚 から 】

小泉八雲の次男・稲垣巖の評伝 を読んで

高 橋 栄

この評伝は、『ある英語教師の思い出 —— 小泉八雲の次男・稲垣巖の生涯』¹ という著書である。著者は小野木重治氏（以後、敬称を省略させてもらい客観的記述とする）である。小野木は自然科学者・高分子化学の専門家である。彼は、1933年4月京都府立桃山中学校（旧制）に入学し、1938年3月に同校を卒業した。その後、京都帝国大学工学部を卒業、京都大学教授を経て、1984年4月から1989年3月まで松江工業高等専門学校長として5年間松江市に在任した。その後、学会活動等にいそしんでいたが、2015年94歳で病没した。²

一方、稲垣巖氏（以後、敬称を省略させてもらい客観的記述とする）は、1920年、岡山・第六高等学校を卒業し、京都帝国大学工学部電気工学科に入学するも、途中学科を変更し、最終的には京都帝国大学文学部英文科選科を1927年3月に修了する。そして1928年4月に京都府立桃山中学校（旧制）に31歳の英語教師として赴任する。野球部長まで

つとめた野球好きの熱心な英語教師・稲垣は、しかしその後、病を得て 1937 年 40 歳の若さで夭折した。

両者の略歴から推測できるように、小野木は英語教師・稲垣巖に英語を教わっていた。小野木は、「たしか三年生のときに、英文法・英作文を一年間だけ教わった」³と述べている。小野木は巖について、「先生は、その教えを受けた桃山中学校の卒業生にとってはいつまでも忘れられない存在であるが、四十歳という若さで他界されたこともあって、ヘルンの三人の子息の中で最も知られることが少なく、不明の点が多い人である。先生の教え子の一人である著者は、このような不明の点、とくに先生の最終学歴と桃山中学校着任当時の履歴とを解明するとともに、桃山中学校における同僚の先生方及び卒業生諸氏の思い出や逸話を通して『稲垣巖先生像』を描き出したいと思った(pp.1-2)」と述べている。そのような著者は、上記の松江市在住の 5 年間に、余暇を利用して、巖の両親である小泉八雲とセツの旧居、記念館、その他ゆかりの史跡を訪ねるとともに、関係図書もできるだけ多く読むように努めた。また、小野木は、巖の三人の遺児たちの健在を確認し、電話で話したり文通したりするようになり、長女・八重子さんと次女・京子さんとは 1990 年に、長男・明男さんとは 1991 年に、それぞれ京都と東京で直接面談する機会を得ている。こうして、小野木は 1989 年の退職を機に、巖に関する「不明の点」の解明に努め、1992 年に上掲書の出版に漕ぎつけたのである。

ここからは、小野木の描く「稲垣巖先生像」から、興味をそそられる点を適宜要約してみることにする。

「巖を知る同僚の先生方や桃中卒業生が、風貌の特徴としてあげられる共通点は、長身、白皙で鼻が高く、一見して西洋人またはそのハーフとわかった(p.85)」ということで、桃山中学校の生徒たちは「青い目の英語教師(p.85)」として認識していたようである。しかし、巖の長女・八重子さんと次女・京子さんは、「父の目は青くなかった。日本人並みだった(p.86)」と話されていたそうである。

稲垣巖は、性格的には感受性が強く、優しく、内気な反面、自分がやりたいと思うことには、異常なまでに情熱と集中力を傾けたようである。桃山中学校の同窓会誌「桃山」34号(1938年3月20日発行)は、「稲垣巖先生追悼号」となっていたようで、同僚の教師(竹淵喜明氏)は追悼文の中で、「先生程野球を愛した人は少ないと思ふ。(中略)一昨年十月職員紅白試合をした時のこと等、諸君も覚えてゐるであらうが、大抵の先生は上衣を脱ぐ位であったが、先生は只一人小生の練習用ユニフォームを着て、スパイクまで穿いて実に颯爽たる姿で一人で跳ね廻ってゐたのに気が附いたであらう。知らない人には、いい年をしてとまるで狂気沙汰に見えたであ

らうが、先生自身にとっては、愉快で愉快でたまらなくて、躍り廻ってゐたのである(p.138)」と、巖の「情熱と集中力」を回顧している。また、巖の「内気」で社交嫌いの面を、そのおなじ同僚は、「大学教授でハーン研究家等が稲垣先生に書面を寄せて、ハーン氏のことについて御面会したいと言ふやうなことが、よくあったが、返書は決して出さなかったし、又直接面会に来られたやうな場合も何とかして御断りしてゐた。断り役には小生等はよく利用されたものである。尤も先生は父のことを口にされるのをひどく嫌がってゐた。それで僕等もハーン氏の事で色々知りたいことも沢山あるが、遠慮してあまり尋ねなかった(p.139)」と述べている。さらに、竹淵氏は、「ついでに先生の最も嫌ってゐたものを御紹介しやう。それは蛙である。(中略)桃中の前の作業園が未だ盛んであった頃先生達が薩摩芋狩りをしたことがある。小生と二人並んで掘り始めたが先生のがどうしてもうまく掘れない、それでやめて帰らうと言ふのを無理矢理引き止めて、力を入れて下から掘り起こしたらいいと云ってやると、先生太い長い腕に力を込めて勢よく掘り返した途端、ぽっくり現れ出たのが、何と大きな蝦蟇ではないか。これは!!」と思った瞬間先生脱兎の如く飛び出した、花も野菜もあつたものではない、猛烈な勢いで宿直室に飛び込んで、(先生丁度宿直日であつたが)布団にくるまり、夕食は勿論翌日の朝食も食わず、布団の中でぶるぶる震えていたのである。そして其の後二三日は小生と一口も物を言はなかつた(pp.139-140)」と、巖の敏感すぎる一面を吐露している。

ところで、著者・小野木自身が、桃山中学校での授業時間に巖から直接聞いた話を引用することにする。「あるとき巖は私たちの授業の残り時間を利用して、死んだ人間の霊魂は肉体とともに死滅するのではなく、ある期間は生きているもので、その生存期間は人間によって違うという話をした。(中略)巖のこの考え方を、かつて私は『霊魂不滅説』と呼んだが、霊魂がまったく不滅というのではなく、ある期間を生きていくということであるから、最近では『霊魂生存説』と称するほうが正確かと考えている。巖の話の最後の部分は、『蛙嫌い』と関係しているのであるが、『自分の死後、死体を木棺に納めて埋められると、棺が腐りかけた頃に蛙が中をのぞく恐れがある。もし、そんなことが起これば、何年間か生きられるはずの自分の霊魂はたちまちにして死んでしまうであろう。棺に納めるのであれば、ぜひ腐ることなく、ふたも重い、石棺にしてもらいたいと願っている』とのことであつた(pp.130-131)」と、小野木は述懐している。1990年8月時点では、稲垣巖夫妻の墓は「府中市・多磨霊園(p.83)」にあるようであるが、はたして、巖は石棺の中にいるであろうか。

また、巖は、「父八雲を語る」という題目で、1934

年 11 月 15 日、京都放送局のラジオ放送に出演している。その放送原稿が遺稿として残っている。その中で巖は、父・八雲について「過敏な神経と、強烈な想像力を享けて生まれた彼が、其の少年時代を精神的に淋しい環境に育てられ青年時代には物質的にドン底生活を強みられるに到って、ますます現実生活の難渋から逃れて、空想の国に慰安を求めやうとし、次第に霊的の方面、怪奇の世界に対して特別の興味を覚えるやうになったといふのは、全く自然だらうと思われます(pp.145-146)」と語っている。また、八雲の執筆中の姿については、「何か書いてゐる時には、その事ばかりに夢中になるのですが、いよいよ油が乗って来ると、よくありもしない物を見たり、聞いたりするやうにさへなりました。これは怪談に限りません。著述に耽る時はいつも、全精神を打ち込んで熱中するので、他の何物をも考へる余裕がなく、何か霊にでも憑かれたやうな様子が見えるのでありました。(中略) 私の記憶にも一当時未だ六、七歳の子供でしたが、『コワイパパ』として、かういふ魔霊につかれたやうな父の印象が、未だはっきり残ってゐるものがあります (pp. 153-154)」と述べている。最後に巖は、八雲を執拗に「怪談」の世界へと向かわせた原因の一つは、「例へばヘルンの固執した万有は同一なりとする思想、或は吾等の胸の底に原始祖先の靈魂が眠ってゐるといふ思想—かういふ仏教的な輪廻の思想は日本の怪談にまことに手ぎはよく具表されてゐる (p. 155)」からであると述べている。

この稿を終えるにあたって、巖についての思い出として、桃山中学のある一人の卒業生が述べた言葉「先生は(中略)教室では厳格で、かつ気品があり、張りのある、よく透る流暢な英語は授業中の圧巻ともいえ、生徒間の人気は抜群であった (p. 198)」ことと、同じく同校の卒業生であり、この本の著者でもある小野木の回想「巖が多くの少年たちに与えた薫陶は、はかりしれない、貴重なものであった (p. 164)」ことを、特に心をこめて掲げておきたいと思う。

註

¹ 小野木重治『ある英語教師の思い出 —— 小泉八雲の次男・稲垣巖の生涯』、東京：恒文社、1992年11月20日。

²

https://www.jstage.jst.go.jp/article/rheology/44/1/44_1/pdf 参照。

³ 小野木重治、上掲書、pp.74-75。以下本書からの引用は引用文に続けて(ページ数)と記す。

【 読書会の記録 】

事務局長 横山 純子

第 119 回例会

2019年4月13日 14:00~16:00

島根大学附属図書館ラーニング・コモンズ1
アンソニー・ケリー氏 講演と作品鑑賞「アイルランドにおけるラフカディオ・ハーンと作品“Hi-Mawari”」 参加 28名(会員 15名 一般 13名)

この講演でアンソニーさんはハーンがアイルランドであまり知られていない理由として、ゲール文化復興運動がハーンの人生と時期が重なり、その後の独立等の歴史の中でもアイルランドが国際的なことに目を向ける余裕がなかったことを指摘された。そして今ではハーンに興味を持つ人も現れ、2015年に八雲庭園が造られたなど、国際的なことにも目を向けるようになっていくことを述べられた。このようにいろいろと興味深い示唆がなされ、質疑応答も活発であった。

第 120 回例会

2019年5月11日 14:00~16:00

島根大学附属図書館ラーニングコモンズ2
参加 12名 “The Chief City of the Province of the Gods” 159.25-163.20.

第 121 回例会

2019年6月8日 14:00~16:00

島根大学附属図書館ラーニングコモンズ2
参加 12名 “The Chief City of the Province of the Gods” 163. 21-167.24.

第 122 回例会

2019年7月13日 14:00~16:00

島根大学附属図書館ラーニングコモンズ2
参加 13名 “The Chief City of the Province of the Gods” 167. 25-171.31.

第 123 回例会

2019年8月17日 14:00~16:00

島根大学学生市民交流ハウス 参加11名
“Bon-Odori” 120.1-123.10.

第 124 回例会

2019年9月14日 14:00~16:00

島根大学法文学部115教室 参加12名
“Bon-Odori” 123.11-127.26.

編集後記：ケリーさん、奥山さん、ご寄稿いただき、たいへん有難うございました。心からお礼申し上げます。

(高橋栄)